

# 終末期方墳

安 藤 鴻 基

---

## はじめに

1. 古墳時代終末期と終末期古墳
2. 終末期方墳の分布
3. 終末期方墳の占地
4. 終末期方墳の墳丘

## 5. 終末期方墳の埋葬施設

6. 終末期方墳の副葬品
7. 終末期方墳の年代
8. 終末期方墳の性格

おわりに

---

## 論文要旨

いわゆる天皇陵に採用されていることからも、終末期方墳の考古学上に占める位置は、相当大きいものがある。にも拘らず従来、総合的な見地から論じられることは、ほとんどなかった。そこで小稿ではまず、全国的な観点から、これを集成し、分布、占地、墳丘、埋葬施設、副葬品、年代について分析を進め、また若干、類型化を試みた。更には性格についても一步踏み込んで、私見を再述した。とは言うものの、終末期の概念からして、共通理解が得られていないのが現状で、独断と偏見を恐れてもいる。一応の成果を要約すると、以下のようになる。

古墳時代の終末期は、埴輪と前方後円墳の消滅を指標として区分される。その時期はおよそ6世紀の末葉から8世紀の初葉にかけてで、方墳と円墳を基本的な墳種とする。終末期方墳は宮崎県から茨城・群馬県まで、173基以上確認されている。畿外では愛媛・静岡・千葉・茨城・群馬県に多い。最大規模は一边80m、高さ12mの千葉県に所在する岩屋古墳で、当時のいわゆる天皇陵よりも大きい。67基以上にのぼる基数といい、千葉県の終末期方墳は、極めて大きな問題を孕んでいる。岩屋古墳の被葬者を蘇我氏乃至同族とみ、蘇我氏の東国進出、直接支配を想定するものである。

古墳が優れて政治的な建造物であるならば、あたかも政治の中心が東国の地に移り動いたかの様相を呈している。東国に多い消滅期の大型前方後円墳の分布状況とも、決して抵触するものではない。もはや7世紀の日本の歴史は東国を抜きにして語っても、無意味に等しいのではあるまい。

---